

## まぼろしの渥美窯を発見

平 安から室町時代にかけての古い焼き物は、六古窯

(瀬戸焼・常滑焼・越前焼・信楽焼・丹波焼・備前焼)が古美術の愛好家を中心に知られていました。

しかし、これらに属さない産地不明の不思議な壺があることが愛好家の間で話題となっていました。

その壺には蓮の花びらをまねた線が壺の肩に刻まれ、黒っぽい色をしている独特の特徴がありました。陶磁器研究者の本多氏(2頁の写真説明を参照)は、その不思議な焼き物に「黒い壺」と謎めいた名前を付けました。この壺の産地の究明は、陶磁研究の大きな課題となりました。やがて、大正時代に発掘された坪沢古窯(加治町)の出土品に、それらしいものがあることが分かりました。

そして昭和38年、加治農業協同組合(当時)の天井裏にしまっていた20数個の壺の中から、ついに「黒い壺」を発見したの

### 秋草文壺

国宝。渥美窯の代表作。ススキ・ウリ・柳やトンボなどの文様が壺をキャンバスとして大胆に描かれ、秋のひっそりとした風情を表現している。(慶應義塾蔵)



### 芦鷺文三耳壺

国の重要文化財。神仏が宿るといわれる州浜に芦と戯れる鷺が描かれている。この壺の製作者は、優れた絵画知識を持っていたのでしょう。戦前・後に電力王と言われた実業家、茶人でもあった松永耳庵が愛した壺。(愛知県陶磁美術館蔵)



でした。

日本陶磁研究の課題であった「黒い壺」の産地が渥美半島だと証明されたと同時に、まぼろしの窯「渥美窯」が、世に出た瞬間でもありました。

渥美窯が営まれた平安時代末期から鎌倉時代は、源氏・平氏が活躍した武士の世となる激動の時代でした。

渥美窯の焼き物は、碗・皿・鉢などの食事に使う日用品のほか、他の産地と違い特注品の焼き物が多いのが特徴です。

その後、国司の名前を刻んだ壺の発見、東大寺再建の瓦を焼いた伊良湖東大寺瓦窯の発掘、渥美窯が瀬戸に先駆けて玉のように輝く釉を全面にかけた焼き物を焼いていたことなど、日本の焼き物の歴史を変えるような、すばらしい発掘や発見が相次ぎました。

そして、渥美窯は六古窯と肩を並べ、日本を代表する窯として知られるようになったのです。また、渥美半島には国指定史

跡の窯跡が大アラコ古窯跡、伊良湖東大寺瓦窯跡、百々陶器窯跡と3カ所もあります。このように複数の窯が指定されている中世窯はほかにはなく、いかに渥美窯が重要視されているかが分かるでしょう。今では、渥美半島各地で500基以上の窯が確認されています。

### 美しさを誇る壺の誕生

**国**

宝『秋草文壺』は、渥美窯の代表作で、中世(鎌倉・室町時代ごろ)の焼き物で唯一、国宝となっています。秋草文壺は、私たちが共感できる美しさが詰まった、まさに日本を代表する壺といえます。

壺に絵を描くことは、当時としてはずいぶん革新的なことでした。また、素晴らしい芸術性を持った人たちが関わっていたことが分かります。渥美窯の職人たちは果敢に新しいことに挑戦していったようです。

同じように絵が描かれた国の重要文化財『芦鷺文三耳壺』も渥美窯の代表作です。